The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	私の知的活動の軌跡
Author(s)	田中, 清助
Citation	年報人間科学. 1987, 8, p. 211-218
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9880
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学人間科学部〔一九八七年二月〕
『年報人間科学』第八号　三一頁―三八頁

私の知的活動の軌跡

田中清助

私の知的活動の軌跡

バビロニア最後の王バルタザールの饗宴の最中、不思議な手が現れ、壁に炎の文字を書いた。その最初の言葉maneとは、ダニエルの解読によれば、〈神、汝が治世を数えあげ、終わりに至らせたり〉ということであった。私が定年までの年数を数えだしたのは、いつ頃からのことであったか、そしていよいよその年が来た。

私が少年期から遠ざかるにつれて、時は得意と失意、高揚と沈滞の跡を残していった。忘却が次第にそれらの痕を消し去っていく。しかし大きく口を開いた跡だけは埋めようもなく残っている。私が話そうとするのは、今直面している過去最大の跡についてであるが、此処に致った経過を説明しておきたい。断っておくが、私はもっぱら自分の思惟の遍歴について語るのみである。

〈肉体の老化以前から精神の老化が始まり、研究者としての死がありうる。〉それは、かく言って教授や先輩たちを批判した私自身を除外してのことであった。これが、アガメムノンに対するテルシテスのように、下にある者のルサンチマンから生まれたとは思わないのだが、後から追い越そうと身構えている未熟な者の、思いあがりに発したものであることは確かであった。

アイルランドの詩人イェーツに『学者』という詩がある。〈お年をめして学のあり／お品もよろしい禿げ頭／かずかずの／かつて犯した己れの罪を／けろりと忘れた禿げ頭／…〉またヘーゲルも教えてくれた、〈(時計が巻かれてひとりでに動いていくといった) 惰性の生活は肉の死をきたすのみである。惰性とは対立を欠いた所為であり、それにとっては、ただ形式的な持続が残っているばかりである〉と。若い私はこういった言葉を喜んで受けとっていた。

しかし己れが年とった教授となって、定年を眼前にしている現在、私はこれらの言葉を忘れはてたわけではなく、むしろ今の自分がこれらの言葉によって裁かれ、鞭打たれていると感じないわけにはいかないのである。これまでに、これこそ私の仕事と胸はって出せる業績が幾つあろうか？この自分自身への問いかけが答えよと否応なく私に迫ってくる。

顧みれば、私は自分が漸進していると信じていた限り、既に扱った問題とそれらに関係した論文郡を、ふり返って再検討しようとはしなかった。新たに書くものが以前の論文よりは進んでいるとして、いわば直線的進歩の線上に位置づけていたのである。しかし歴史が人間の意思、意欲に依存することなく動いていく以上、歴史を我が物にしようとする人間は、そこにくりかえし謎を見いだすであろう。

その謎に対して客観的に正しい答を出してこそ、それまでの歴史を我が物にすることができるのである。

二十才台から四十才台にはいるまで、私の研究活動は多産だったと云えるかもしれない。しかし論文の数こそ殖えても、それらの大部分はうたかたの如くに消えていった。だが私は消え去ったものを惜しむ気は全くなかったのである。私としては、大社会学者の著作には遠く及ばずとも、せめて数年は問題にされるような、あるいは何年か後になって価値が見直されるような論文を、自分自身の言葉で書きたいと念願し、マルクスは別として、社会学者の誰かの後について行こうとは考えていなかった、そうでなければ研究者とは云えない、と考えていた。

私の関心は古代の神話・伝説に向かった。私はそれを逃避とは考えなかった。なぜなら神話や伝説は遙か後代にまで伝わったのであるが、その理由は、それらの内容が荒唐無稽なものであるにせよ、人間の思惟の基本的形式を示していたからではなかったであろうか、だからヘーゲルにせよマルクスにせよ、出所を明示しなかったことも多いのだが、彼等自身の著作中に引用したのであろう。それを明らかにすることによって、私がぶつかっていた壁を突破する途を見出すこともできるのではないか、と考えたからであった。

一例としてかなりよく人に知られた賢人説話をとりあげよう。その賢人は予言をよくしたので知られていたのであるが、何故言うことがあたるのか、と人に問われた時、それについては、相談に来る者がもってくる問題自体のなかに、解決する答が既に隠れている、それを観てとって言うのだ、と答えたとその伝説は語っていた。

マルクスもサン-シモンもともにこの伝説に示唆されて、〈歴史の必然性は、出口を示すことなしには時代の没落を許さない〉というのが彼等の信念であった。マルクスについて、彼の主要な著作で伝説に対応している部分をとりだすならば、まず『経済学・哲学手稿』で、〈この新しい問いの提起は、すでにその解決を含んでいる〉〔MEW,Bd.40,S.522〕という箇所である。この文脈を言えば、マルクスはその先に〈労働の疎外、外化を一つの事実として受取り、その事実を分析してきた〉と書き、そして〈今や我々は問う〉と続ける。この〈今〉とは事実分析の過程が終わって次に叙述過程が始まる時点を示している。このことは認識的思惟の運動について述べるところで具体的に再説するであろう。しかし叙述過程は分析過程には出てこなかった問いが出発点にあるのであって、〈新しい問い云々〉は叙述過程の問題を指していたのである。

『経済学批判』の序言ではより周到に、明確に書かれていた。すなわち、〈一つの社会構成体は、それの十分容れうる生産諸力が発展し尽くすより前に没落することはないし、新しい・より高度な生産諸関係が物質的に存立できる条件が古い社会自体の胎内で既に生まれ終わっているより以前に、そういう生産関係が座につくことはない。そこからして人類は常に解決しうる課題のみをたてるのである。なぜならもっと厳密に観れば、課題そのものはそれを解決する物質的諸条件が既に存在しているか、あるいは少なくも生成する過程にあるところでのみ生じることが常に見出されるであろうから〉とし

た箇所である。〔MEW,Bd.13,S.9〕『資本論』でも、〈課題はそれの解決の手段と同時に生じる〉という表現を見出すのである。〔MEW,Bd.23,S.103〕

誤解しないで欲しいのだが、私はマルクスの考えていたことを古代からの伝承に帰着させて、能事終われりとしているわけではない。問題は、伝説に含まれていた思惟の基本的形式を、彼等の天才がどのような思惟材料を捉えた上に適用し展開していったか、ということである。古代伝説や説話は彼等に思惟を発展させる手がかりを与えたのみであるが、人類の思想史を問題にする時、一旦は古代に還って、それから再度現在に戻る運動を観るのである。

長い人生行路はマラソンにたとえられようか。たしかに約40kmに及ぶ長丁場では、自分の体力を考慮しつつ、時間を配布することがもっとも大切であり、このことは人生行路についても云えよう。だがその外にも、共通点として、どちらにも折り返し点があることに注意したい。

しかし、マラソンの場合は往路も帰路も同じ風景のなかを走るのであるが、それに対して、一般的に云って人間的時間においては、往相と還相とを対比すれば内容的に還相の方が往相よりもより豊富になっていると云えよう。これはマルクスが『経済学批判要綱』、すなわち一八五七～五八年手稿の序説中、《経済学の方法》のところで明確に説明しているのである。

〈……それが故私が人口から始めるとすれば、それは人口の全体の混沌とした表象なのであり、もっと詳しく規定していくことによって、分析的にますます単純な概念に至るであろうし、表象された具体的なものからいよいよ内容貧しい抽象物に進んでいって、遂にはもっとも単純な諸規定に到るであろう。そこから今度はまた後方への旅が歩み出されねばならず、結局私はふたたび人口の許に到達するのであるが、今度は全体の混沌とした人口表象にではなく、多くの規定および関連をもつ、内容豊かな全体としての人口に行き着くのであろう。……最初の途では、まるのままの表象が揮発して抽象的な規定となり、第二の途では、抽象的な規定が思惟のなかで具体的なものの再生産に導くのである。そこからヘーゲルは客在するものを、自体のなかに総括し自体に沈潜し自己自身から運動する思惟の結果として捉える幻想に陥ったのであるが、しかしながら抽象的なものから具体的なものに上昇する方法は、まさに、具体的なものを我が物にし、それを精神的に具体的なものとして再生産するための、思惟にとっての仕方でこそあれ、具体的なもの自体の発生過程ではけっしてない。〉〔MEW,Bd.42,S.35〕

『精神現象学』でヘーゲルは叙述過程について見事な説明を与えた。〈学は形成する運動をそれ細目まで立入り、また必然性において叙述し、そして既に精神の契機となって所有されているものをその成態化において呈示する。めざすものは、知の何たるかを精神が認識することである。性急さは手段ぬきで目標を達成するという不可能なことを望む。だが一方ではこの道程の長さに耐えねばならぬ、なぜなら各契機は必然的なものであるから。また他方では各契機のもとで逗留しなければならない。なぜなら、各契機はそれ自体一つ

の個性的かつ全体的な成態であり、各契機が全体的なものとして、あるいは具体的なものとして考察される限りで、あるいは全体がこの規定作用の独自性において考察される限りでのみ、他から制約されることなく考察されるのである。〉〔Hegels Werke, Bd.3, S.33〕だがこの道程は、マルクスの場合のように二重ではない。それ故にヘーゲルにあっては、マルクスとは逆に、叙述過程が先にあり、分析過程が後になっていると私は考える。

ゴルディウスの結び目についての古代伝説も私の注意を惹きつけたものであった。古代フリギアの王ゴルディウスはゴルディオンの町を創建し、そこにその町の守護神キュベーレを祭る神殿を建てて馬車を献納したのであったが、車の長柄をくびきに結びつける綱に複雑な結び目を作ったという。そして結び目には、これを解く者は世界の王とならん、という神託が付いていた。神託に応じて、結び目を解きほごそうとした人間は多かったが、誰一人として成功した者はいなかった。ペルシャ征討の途に上ったアレクサンドロスがこの町に来た。彼の行為は従来の試みとは違って、長剣を振るうと一挙に結び目を切断したのであった。

このアレクサンドロスの行為は、解いてみよというキュベーレの神託を無視するものであったが、それにもかかわらず、いやそれによってこそ、ゴルディオン古来の神は追放され、ギリシャの神アテナがとって代わったのであった。

因みに私の考えるところでは、この伝説は、永劫に回帰するところの、暦における時間によって支配されたより古い古代社会が、歴史における時間の支配するより新しい古代社会へ転移した時に生じたのであった。この転移を象徴するのがアレクサンドロスによる長剣の一閃であった。

かって話したことであるが、ロシア語の動詞は完了体と不完了体とをもっている。両者の違いについては、例えば〈私は問題に答えようとしたが、解決できなかた〉という文章のロシア語訳では、答を出そうといろいろやるのに《解決する》の不完了体 решать を、決定的な答が出た時には、完了体 решить を使うことから推量できよう。ゴルディオスの結び目伝説で云うならば、アレクサンドロスが来る前、諸人が解こうと試みたのには不完了体が使われ、他方アレクサンドロスの行為は、問題の所在を断ち切った故に完了体の解決であった。

次に言うことは決して単なる付言に終わらぬと考えるが、決定する、決心するは、英語でもフランス語でも、元来はラテン語のdecidereから由来したことを知っている人は多いと思う。ところが、その原義は切ることを意味していたのであり、それにはゴルディオスの結び目伝説が大いに関係していたのである。そこからして、OEDによれば、decideはcut off the knotの意味をもつし、フランス語のtrancherにはtrancher le noeud de la questionの語法がある。さらにドイツ語でも決定、解決の意味のEntscheidungの中にはscheiden（分ける）がはいっている。

伝説の中の《切る》という行為の意味を再検討するのは決して無意味ではない、と考える。それは、暦における時間と歴史における

時間とをきっぱりと分けたのであった。

マルクスは『経済学・哲学手稿』の《私的所有と共産主義》の終わり近くで、二人の人間の討論を想定していた。一方は、自分は父から生まれ、その父は祖父から生まれ、その祖父はまた……という風に進んでいって遂には造物主にまで行き着く、と主張したし、他の一人は、そういう無限進行だけ観るのは一面的だ、その進行のなかで感性的に直感される円環運動をしっかり把握することが大切なのだ、というのであった。この矛盾把握は一八五七～五八年草稿中の《貨幣にかんする章》で貨幣の流通を論じたところに、題材を換えつつ再現する、すなわち、

〈一瞥したところでは、流通は悪無限の過程として現れる。商品が貨幣と交換され、その貨幣が商品と交換され、こうしたことが限りなく繰り返される。同じ過程がこうしてたえず更新されることが実際に流通の本質的契機をなす。だがもっと詳しく考察すると、流通はまた別な現象をみせる、すなわち連接現象、あるいは出発点が自体へ還帰する現象である。〉

進行と還帰、この矛盾した運動が暦時間を進めていくのである。しかしそれではまだ暦の枠を突破することはできないであろう。その枠を破るには何が必要か？ここに《切る》という行為の問題が現れる、と私は考える。

この問題が浮かび上がったのは、名古屋大学にも大学紛争が波及してからであった。紛争以前の私には《切る》という問題意識はなかったこと告白しなければならない。紛争以前の私を領していたのは、〈古京すでに荒れて新都未だ成らず〉という鴨長明の悲観論に裏打ちされた、諸論文の同質的連続観であったが、《切る》場合には異質的なものとの不連続がなければならない。紛争中、私は自分自身の言葉を探りながら、沈黙しつつ《切る》ことの意味を考えていた。《切る》時は異質的なものとの不連続がなければならない。そして紛争が表面的に片付いた時、私はもう五十才になっていたのだが、名大を去ってこの人科に移ったのであった。これも私には一つの切断であった。爾来十年を超えたが、私はまだ第二の途への出発の準備を終わってはいない。これが現状である。

大学卒業から今日までを幾つかの部分幕に分けて構成することもできるし、長い人生の経路を全体として観る時、大きな一幕の幕切れに近づきつつあると観ることもできる。幾つかの部分幕はそれぞれ開始―中間過程―終結の構造をもち、目的論からすれば、開始を規定した目的が終結において実現されるのである。そして各実現が相結んで、全体幕の始―中―終を準備する、あるいは全体幕の終結に向かって集中していくであろう。マルクスは『経済学・哲学手稿』で、全体としての歴史を〈準備の、発展の歴史〉と観ていた。〔MEW, Bd.40,S.544〕

現在、私はまだ生涯の結末の手前にいる。私の前途にはまだ確定されていない部分が残されている。この後の生きようについて最後に話しておきたい。新たな出発といった言葉を、この際私は使わないであろう。定年は私にとって一つの区切りである。だがその後すぐに次幕が始まるのではない。人生の演劇においても、区切りの次

にあるのは間（マ）であり、この間に媒介されて新たな開始が来る。この間は空白の、欠如の時間ではない。世阿弥は『花鏡』の《万能を一心につなぐ事》の条で書いていた、〈見所の批判に云、「せぬ所が面白き」など云事があり。是は、為手の秘する所の安心なり。……せぬ所と申は、その隙（ヒマ）なり。……是は、油断なく心をつなぐ性根なり。……此内心の感、外に匂ひて面白きなり。〉（見物人の批判に、「何もしないところが面白い」などと云うことがある。これは演能の主役が秘める内心の工夫なのである。……何もしないのは、わざとわざとの間隙であるが、これは心を油断なく働かせ、わざわざとの隙をつなぐ心づかいによるものである。……この心奥の緊張感がそこはかとなく外に現れ出て、面白く感じさせるのである。）〔日本思想大系24『世阿弥・禅竹』、100頁〕

私の前には解放された隙がある。しかしそれは、無為に見えようとも、空白の、欠如の時間ではない。私はそれを世阿弥から学んだ。その間に新たな出発の準備を整えた上で、次幕に出ていかねばならない。これで講義を終わります。